



かい 織 画 画 織

伝統とハイテクの融合で名画も忠実に再現 色の濃淡にこだわり抜いた芸術的な織技法

経糸と緯糸の交錯を「点」と捉え、経糸を一本ずつ動かすことで複雑な模様や色の濃淡を出し、糸で無限に色を表現できる織技法「絵画織」。桐生織に最先端技術を掛け合わせ、その名の如く絵画そのもののように忠実な再現度を誇る逸品への注目度は高く、帯製品のほか、手頃なサイズのブックカバーやコースター等は東京国立博物館や東京国立近代美術館のミュージアムショップに並ぶなど、幅広く人気を博し重宝されている。

絵画織の技術は境野町の機屋、アライデザインシステム(有)を営み新伊美術織物研究所を主宰した伝統工芸士、新井實さんが試行錯誤の末に考案。實さんは新伊織物(株)(当時)を創業した新井伊一郎氏の元へ婿入りし同社を継承すると、持ち前の独創性を発揮し製品開発では常に斬新さを追い求めた。絵画織の原点は昭和62年。群馬県立歴史博物館における「中国陝西省文物展」開催に合わせ、陝西省に位置する兵馬俑を、写真に基づき精巧に織物で表現し額装した土産品を制作。彩色の濃淡も妥協を

許さず見事に再現した製品は人気を呼び、その技法を確立する契機となった。平成7年に特許を取得すると、平成14年には建仁寺より依頼を受け、国宝屏風「風神雷神図」を絵画織で制作し奉納。令和元年には天皇陛下御即位を祝した群馬県から天皇、皇后両陛下への献上品に絵画織の「富岡製糸場錦絵之図」が選定・献上されるなど、多方面から脚光を浴び、多くの人々を魅了してきた。

現在は父・實さんと同じく伝統工芸士で現会社代表の新井伊知郎さんが特許技術を継承し、歴史的な名画から親しみやすい動物やキャラクターまで、様々なニーズに応えた製品を創作。實さんは令和7年6月21日に92歳の生涯を閉じたが、實さんの気概を受け継ぐ伊知郎さんの手で、末永く芸術的な絵画織が伝えられる。



新伊美術織物研究所
アライデザインシステム(有)
●住所／桐生市境野町6-444
●電話／0277-44-4718
●HP／<https://kaigaori.net/>